

最上川と私たち

シリーズ・その

世界の四大文明は、ナイル、チグリス・ユーフラテス、インダス、黄河という河川の流域から起こっている。山形県の歴史も最上川とともにあり、人々は最上川を「母なる川」と呼ぶ。自然環境も暮らしも産業も文化も最上川を抜きに語れない山形県なのだが、県民は果たして最上川の何を受け継ぎ、何を未来に伝え、人と川とどのような関係を構築しようとしているのだろうか。最上川をテーマに、山形県の未来を考え、在るべき県土をイメージしてみよう。この欄は、「県民の川・最上川」についてシリーズでリレー執筆する。多くの県民の方々と一緒に考えたい。

校歌という文化



最上川を文化的・歴史的側面からとらえた場合、その切り口は非常に幅広い。

かつて、源義経は頼朝の迫害を逃れるため、最上川を東方にさかのぼったと伝えられ、松尾芭蕉は、『奥の細道』で最上川を旅し、「五月雨を あつめて早し最上川」などの句を残した。また、江戸時代から明治期にかけて、最上川は紅花や米などの運搬に利用され、さらに、近代以降も、斎藤茂吉など多くの歌人・俳人が、最上川を歌や俳句に詠んでいる。

しかし、今日、最上川が県民の財産として親しまれているのは、最上川が多くの校歌に登場し、歌い続けられてきたこととも無縁ではなからう。

そこで、今回は“校歌”という文化から、最上川を考えてみたい。

校歌に託される思い

大辞林（三省堂）によれば、校歌は「その学校の教育理念や校風などを内容とし、学校で制定して、生徒たちに歌わせる歌」と定義されている。

同時に、校歌は、地域の自然環境や歴史等を歌い込むという共通のスタイルを有している。そうした定型性ゆえに、校歌に歌われた自然環境などは、学区（地域）住民に共有された環境認識（知覚）の特性を反映し、しかも歌い継がれて定着し、伝えられていく。

さらに、校歌は郷土の風景と共に、学校での思い出を記憶にとどめる役割を果たしている。白鷹町で「白鷹町内の校歌をのこす会」が発足し、統廃合された学校も含めて、昨年3月に『学び舎のうた～白鷹～』を出版したのは、その一例ともいえる。

ところで、校歌を制定する場合、誰が作詞者になるかは、学校によってさまざまである。

例えば、昭和47年に南平田中、高畑中が統合して開校した飛鳥中（平田町）は、初代学校長が作詞した。また、天童市立第三中（天童市）、朝日中（朝日町）、横山小（大石田町）、赤松小（大蔵村）、狩川小（立川

町)などの校歌は、山形市出身の詩人・真壁仁が作詞し、さらに、米沢工業高校の校歌は、「荒城の月」の作詞者であり、英文学者として旧制第二高等学校(東北大学の前身)の教授を務めた土居晩翠によるものである。

一方で、こんなエピソードもある。

村山市立西郷中(今年3月で閉校)の校歌の作詞者は、当時のPTA会長の叔父でもあった、早稲田大学教授の工藤直太郎であるが、東京在住が長く、故郷に帰ることがほとんどなかったため、周辺の環境がよく分からなかった。

そこで、当時の学校職員と、周辺の環境について幾度か文通を重ねながら、歌詞(1番~3番)の骨組みが出来上がったのだが、いずれも最初の一句はその職員の発想がそのまま取り入れられたという(『創立五十周年記念誌 羽陽の輝き』より)。

県内全域で歌われる「最上川」

校歌に歌われる自然環境は、山、川、海、樹木、花、田野など、非常に多くの要素がある。

山形県が、県内の学校(小学校、中学校、高校)の校歌について、山や川など、いわゆる地物の頻出度合いを調べたところ、学校数、市町村数ともに、最も多かったのが最上川であった(図1)。また、市町村の分布を見ても、源流地の米沢市から河口部の酒田市まで、流路に沿って県内全域にまたがっている(図2)。中でも、源流のある米沢市や、河口のある酒田市、自治体内を最上川が縦断している白鷹町や村山市、大石田町などで、校歌に最上川を含む学校が多い。

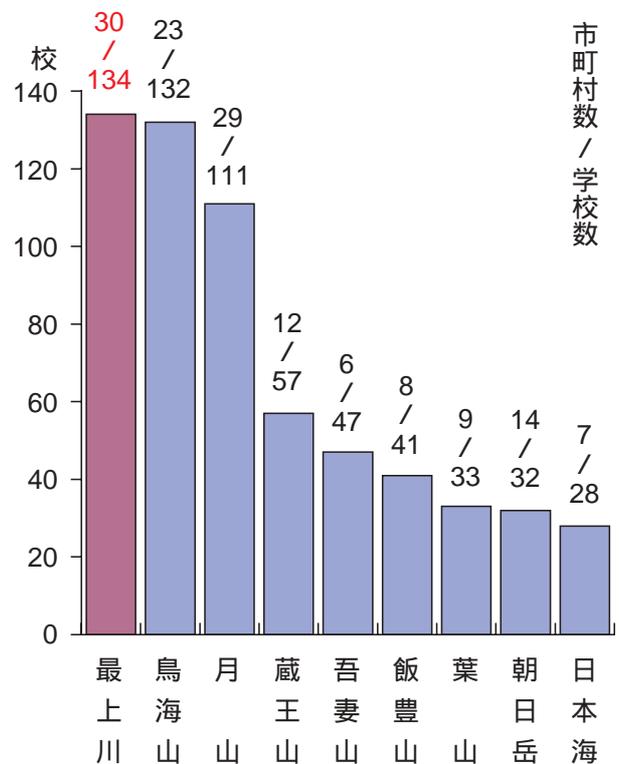
校歌に最上川が入っている学校の多くは、最上川から比較的近い位置にある。しかし、最上川に接していないか、わずかにかすめているだけの、山形市や新庄市でも、校歌に最上川が入っている学校が多い。

例えば、山形南高校や山形西高校、東海大学付属山形高校、山形大学附属中は、市街地にあつて最上川とはずいぶん離れているにもかかわらず、校歌に最上川(類語を含む。以下同じ)が入っているし、新庄北高校や新庄南高校も、市街地にあつて最上川とは離れているが、校歌に最上川が入っている。

これらの学校は、他市町村も含めて学区が広く、その学区内では最上川が流れているため、広いイメージで、校歌に最上川が入っているのであろう。

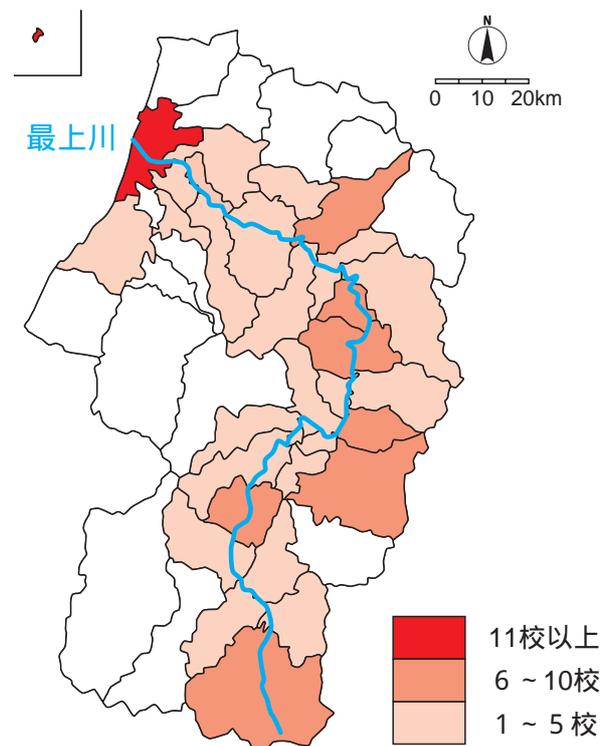
また、校歌に最上川が入っている学校は、比較的歴史が長いことも特徴である(ただし、創立時の校歌が現在も同じとは限らない)。これに対して、新設校で

図1 県内学校の校歌での地物頻出度



出典：『山形県県土景観ガイドプラン(平成7年)』(山形県)

図2 「最上川」が校歌に含まれる学校数



出典：『山形県県土景観ガイドプラン(平成7年)』(山形県)

は、そもそも特定の地物を含まない抽象的な校歌が多い。

ともあれ、校歌において、最上川は故郷を代表する全県的なシンボルなのである。

最上川が伝えるもの

では、校歌の中で、最上川はどのように歌われているのだろうか。

筆者なりに、歌詞の文脈によって大きく分けると、

学区（地域）のシンボル

母なる川としての愛情

濁りのない清らかさ

汚れのない真理

悠久の歴史

日本三大急流になぞらえた力強さ

一筋の流れとしての真っすぐさ

大河としての雄大さ

に分類されると考えられる。もちろん、複数のパターンが混在するケースもある。

まず、の例としては、戸沢小（戸沢村）の校歌がある。

最上の川のそのほとり はたらく里のよるこびを

次に、最上川はよく“母なる川”といわれるが、の例としては、西五百川小（朝日町）や天童高校（天童市）の校歌がある。

広がる愛は最上川 波にきらめく若い鮎

（西五百川小）

河は呼ぶ はぐくみの母なる声よ うるわしの最上の流れ

（天童高校）

は、筆者の印象では最も多いと思われるが、例を挙げると長井小（長井市）や山形西高校（山形市）の校歌がある。

海に入るまで濁らざる 最上川辺に育つ子等

（長井小）

清き誇りははるばると 鏡と澄める最上川

（山形西高校）

また、の例としては、山形南高校（山形市）の校歌がある。

はるかなり 最上の流 五月雨を あつめて迅く
真理の夜明けよ このひとすぢに 君とわれ ここ
に競ふ

さらに、の例としては、左沢小（大江町）や新庄南高校（新庄市）の校歌がある。

古い歴史の水郷を 流れて止まぬ最上川

（左沢小）

歴史は永き最上川 世紀の明日をになうもの

（新庄南高校）

ところで、最上川は、富士川（静岡県）、球磨川（熊本県）とともに“日本三大急流”に数えられるため、も比較的多く見られるが、例を挙げると小田島小（東根市）の校歌がある。

最上の川に身を鍛え 正しく伸びるよるこびに

また、の例としては、上郷小（米沢市）の校歌がある。なお、松川とは最上川の源流近くの名称である。

やまず流るる松川は 遂に海にぞ注ぐなる 人も正しき道踏まば いずくの果てが行かざらん

最後に は、河口がある酒田市の学校に多く見られるが、中でも酒田工業高校の校歌はスケールが大きい。

豊けさよ最上の流れ いく曲がり大地うるほし そそぎ入る酒田の港 祖国の希望を担い われら往く七つの海を

なお、柴橋小（寒河江市）のように、ストレートに最上川を礼賛する校歌もある。

最上の流れは日本一 僕らの希望も日本一

このように、最上川は校歌の中で、実に多くのメッセージを、児童や生徒らに伝え続けている。

消える最上川、残る最上川

人口減少による児童、生徒数の減少によって、学校の統廃合が進んだ地域は多い。県内において、昭和40年に521校あった小学校は、現在では337校に減少している。また、中学校は昭和40年に214校あったが、現在では126校に減少している。つまり、それだけ“校歌”が減少したのである。

昭和42年、旧天童中と旧山口中、および旧田麦野中が統合して、天童市立第二中が発足した。かつて、3校とも校歌に最上川が入っていたが、第二中の校歌にも、最上川が入っている。

豊かにみゆる村山平野 見よはるけきを最上のながれ
(天童市立第二中)

また、昭和52年には、朝日町にあった旧大谷中、宮宿中、西五百川中が統合し、一町一中学として朝日中学が発足した。ここでも、かつて3校とも校歌に最上川が入っていたが、朝日中の校歌にも、最上川が入っている。

こころの旅に永遠の 歴史を語る最上川
(朝日中)

つまり、学校(校歌)は減っても、最上川は残ったのである。

一方で、消えていく最上川もある。

昭和54年、河北町内の4つの中学校が統合し、一町一中学として河北中が発足した。4つの旧中学校のうち、2つの中学校で校歌に最上川が入っていたが、現在の河北中の校歌には、最上川は入っていない。

また、平成10年に鶴岡家政高校と鶴岡西高校が統合し、鶴岡中央高校が発足した。旧高校では2校とも校歌に最上川が入っていたが、現在の鶴岡中央高校の校歌では、最上川は入っていない。さらに、酒田西高校では、平成9年に校歌が変更され、それまで入っていた最上川が消えた。

ところで、村山市では、少子化と校舎の老朽化によって、市内に6校あった中学校が、統廃合によって昨年度から今年度にかけて2校になった。かつて、6校中4校の校歌に最上川が入っていたが、現在では2校とも校歌に最上川が入っている。

たおやかな 最上の川の輝きに
(新橋岡中)

走れ轟け満たせよ光 最上の水になればこそ
(新葉山中)

ちなみに、葉山中の新校舎内には、統合前の旧三中学校(葉山、戸沢、大高根)の年譜や、校章・校歌、写真、記念の品々などが展示されているコーナーがある。校歌のメロディーを聴くこともできるため、試しに3校の中で唯一校歌に最上川が入っていた、旧戸沢中のボタンを押してみた。

豊かに実る村山盆地 清き最上をみはるかず
(旧戸沢中)

57年間、このメロディーに沿って、数多くの生徒が最上川を歌ってきたのかと思うと、胸が熱くなる思いがした。

(荘銀総合研究所研究員 山口泰史)



旧戸沢中(村山市)。平成16年3月、57年の歴史に幕を閉じた。校舎は開校当時のままである。



葉山、戸沢、大高根の3中学校が統合して新校舎となった葉山中(村山市)。最上川は校歌に受け継がれている。